【報　告】

入学前教育としての海外研修における学習成果の検証
―参加者の体験レポートと追跡アンケート調査の比較から―

水松巳奈[1)*]

1）東北大学高度教養教育・学生支援機構　大学教育支援センター

本稿では，東北大学で2013年度よりAO入試等で合格した入学予定者に実施している「入学前海外研修（以下，本研修）」の取り組みについてその内容とプログラム開発における工夫などについて詳細を紹介する．加えて，本稿では，これまでの研修参加者が提出した体験レポート及び，研修終了後半年以上経過した時点で実施した追跡アンケート調査で収集したデータを量的・質的に分析・考察することで本研修での参加者の学習成果について検証した．その結果，入学前海外研修の効果として（１）ほかの参加者からの刺激や学び，（２）自文化や異文化への関心の高まり，（３）海外へ行くことへのハードルの低下，（４）大学生活における目標の明確化の４点が確認され，本研修は参加者にとってポジティブな学習成果を与えていることが分かった．以上のように，入学前海外研修は２週間という短期間の海外研修でありながら，参加者の学習成果の観点から入学前教育として有効であることを確認した．

１．はじめに

近年，日本の大学ではAO入試や推薦入試など，多様な形態の入試制度が定着し（髙橋 2016，文部科学省 2013），様々な入試を経て大学に入学する学生が増えている．東北大学（以下，本学）でも現在，大学入学者に対するAO入試合格者の割合を約３割まで広げることを目標にしている（東北大学 2018）．このように，全国的に入試改革が推進されている昨今，AO入試等で入学する学生に対する入学前教育が日本の大学において充実してきた（川西 2008，山岡 2015）．この影響より，日本の大学においてAO入試等を実施する学科の79％では，リメディアル教育を中心とした入学前教育を実施していることが報告されている（ベネッセ教育総合研究所 2014）．本学のAO入試は「学力重視」（東北大学 高度教養教育・学生支援機構 2018）で実施されていることもあり，合格者に対する入学前教育は学力の伸長と入学への準備を行うことを目的としている．

AO入試は一般入試で入学する学生より早く大学への合格が決まる．そのため，本学ではAO入試等の合格者に対して各学科が主体となって，入学前教育を実施している． 2013年度からはそれらに加え，本学のグローバルラーニングセンターが実施主体となり，入学前海外研修（以下，本研修）を開始した．本研修は，大学入学前の参加者らが，大学入学前のギャップタームに海外で研修を行いながら大学入学準備を行う，これまでに日本のみならず世界においてほとんど前例がない取り組みである．そこで本稿では，本研修の取り組みについて紹介するとともに，参加者に対して実施した体験レポートと追跡アンケート調査（以下，追跡アンケート）を分析する．本研修が参加者にとってどのような学習成果があったのかについて検証することで，本研修の入学前教育として有効性について明らかにする．

２．入学前海外研修について

2.1　本研修の実施に至った背景

本学では，2012年に文部科学省の「グローバル人材育成事業」に採択されたことをきっかけに，2013年に東北大学グローバルリーダー育成プログラム（以下，TGLプログラム）を開始した．それ以来，TGLプログラムの一環として，学部生向けの短期海外研修のプログラム開発・実施を拡充してきた．本学では，このような在学生に対する取り組みだけでなく，AO入試・推薦入試等で一足早く本学への入学が決まった高校生を対象にして入学前海外研修を2013年度より他大学に

*）連絡先：〒980－8576　仙台市青葉区川内41　東北大学高度教養教育・学生支援機構　mina.mizumatsu@tohoku.ac.jp

表1. プログラム概要（平成29年度実績）

実施期間	2018 年3月4日～3月 18 日（2週間）
対象者	下記，入学試験による 2018 年度入学予定者 （英語力不問） ・ AO 入試 II 期（文・理・工・農・医・歯学部） ・ 科学オリンピック入試（理・工学部） ・ 国際バカロレア入試（文・理・工・農学部）
研修先	カリフォルニア大学リバーサイド校 ・本学協定校 ・2013 年に「東北大学センター」を設置 ＊2017 年度より他大学でも実施。
滞在方法	ホームステイ（2人1組）
参加費	22万円（2015 年度より，東北大学基金より奨学金を支給）

先駆けて開始した（表１参照）．このような入学予定者を対象とした全学的な海外研修の導入は，国立大学において初めての取り組みであった（東北大学 2013）．本学では，長期スパンでグローバル人材としてのスキルや態度を身につけてもらう目的で，海外留学プログラム全般において在学生には学部のできるだけ早い時期に参加することを推奨している．そのため，本研修はその目的にも合致していることになる．

2017年度には，本学のAO入試合格者約200名のうちの約15％程度である33名が本研修に参加した．なお，2016年度にはニュージーランド・オークランド大学，2017年度には米国・ワイオミング大学においても同様の研修を行ったが，本稿では，その中でも2013年度から継続して実施されている米国・カリフォルニア大学リバーサイド校（以下，UCR）での研修に着目して検証する．次節では初めに，本研修を実施しているUCRと，UCRが位置するリバーサイド市について簡単に説明する．

2.2　カリフォルニア大学リバーサイド校

本学の協定校であるUCRは，仙台市と姉妹都市提携を結んでいるカリフォルニア州のリバーサイド市にある．リバーサイド市は，ロサンゼルス市の約100㎞東に位置しており，米国の柑橘類栽培の発祥地であると同時にオレンジ産業の中心地として発展してきた．UCRは，本学が創立された年と同じ1907年にカリフォルニア大学の柑橘類研究所として設立され，現在ではカリフォルニア大学システムをなす10大学のうちの１つとして，世界レベルの研究・教育を推進している．2018年時点で約23,000名の学生が在籍しており，うち20,000名は学部生，3,000名が大学院生という構成である（UCR 2018）．

さらに，カリフォルニア州は，メキシコとの国境に接してことからメキシコからの移民が大勢住んでいることも特徴である．このことはリバーサイド市の人口構成からも見ることができ，2010年国勢調査によると，総人口303,871人のうち，ヒスパニック系が約半分を占めている．その他の人種の割合は，白人34.0%，黒人7.0%，アジア系7.4%となっている．UCRの在学生をみても，ヒスパニック系の学生が37.7%と最も多く，次にアジア系（30.4%），白人（14%），外国人留学生（6.9%），二国籍以上（5.6%）と続く（UCR 2018）．これらのデータからも分かるように，リバーサイド市はアメリカの中でも多文化共生が進んでいる地域と考えられており，本研修のテーマである「カリフォルニアで学ぶ多文化・多民族社会」を学ぶには適した立地だと言えよう．

2.3　応募から参加者決定のプロセス

入学前海外研修は，先述の通り，本学にAO入試や，

科学オリンピック入試，国際バカロレア入試で合格した者が応募できる研修である．本研修の対象者は，大学から郵送される合格通知とともに，入学前海外研修の募集案内を受け取る仕組みになっている．近年では，本学のAO入試を受けると決めた時点で高校の先生や先輩から本研修について紹介され，応募を決めていた参加者もいるようである．

本研修への応募に際して２つのエッセイ[1)]を提出してもらっており，運営側はこれらのエッセイをもとに選考している．例年のケースだと，本研修に応募する者の半数程度が海外に行った経験が一度もない．また，海外に行った経験がある参加者も，高校などの修学旅行で数日間近隣諸国に行った程度の経験しかないことがほとんどであり，親元を離れて２週間の期間，海外で生活することにハードルが高いと感じている応募者も少なくない．参加希望者のこのような基本的な情報は応募時点で記入してもらうことで把握しており，運営側は参加者の要望や不安に適宜対応できるように準備している．本研修の合格倍率に関する質問はよく挙がるが，2018年度時点で非公表であるためここでも割愛する．

参加者らは，参加決定直後から事前オリエンテーションの参加やパスポートの取得など，本研修に向けての準備を開始する．次の節では，参加者決定から現地に行くまでの準備期間でどのような取り組みが行われているかについて紹介する．

2.4　参加者同士のラポール構築のための方策

本研修は大学入学前に実施するため，参加者らはお互いのことを研修に参加するまで面識がない．知らない者同士が海外で共に２週間過ごすことはハードルが高いことが予想されるため，参加者間の繋がりを強化する目的で，運営側は現地研修に行く前からオンラインでの事前オリエンテーションの実施や，共同の課題提出などを通した参加者のラポール構築のために多岐にわたる工夫をしている．ここではそれらの具体的な方策について紹介する．

2.4.1　オンラインでの事前オリエンテーションの実施

本研修では，現地研修に行く前に二度の事前オリエンテーションを行なっている．具体的には，オンラインのコミュニケーションツールであるGoogle ハングアウトを利用して実施しており，それぞれのオリエンテーションの内容は次の通りである．

表2. 事前オリエンテーションの概要

	オリエンテーション内容
第１回	研修の概要，参加者の自己紹介， 課題の説明，異文化理解について， 出発準備についてなど
第２回	危機管理，出発日の注意事項など

表２で示してあるように，第１回目の事前オリエンテーションでは，主に研修の概要や出発までの課題，参加者同士の自己紹介などを行う．第２回目の事前オリエンテーションでは，本学が加盟している特定非営利活動法人海外留学生安全対策協議会（JCSOS）の担当者に危機管理に関する研修を多種多様なデータや事例を扱いながら，専門的な知見から実施してもらい，現地で起こりうる危機に備えている．参加者らには本研修での安全管理、健康管理等について十分理解した上で誓約書の提出も義務付けている．現地研修中は，本学の教員が引率しているものの，本研修が初めての海外渡航になる人も多いため，危機管理については細心の注意を払っている．

ここで運営側の事情を少し補足すると，２回の事前オリエンテーションと言っても，学生とのインタラクションの観点と運営側のキャパシティの都合により一度にオリエンテーションに参加する人数は10名程度としている．そのため，同じ内容のオリエンテーションを２度ずつ，合計４回を行っている．また，多くの参加者がこれを機にパソコンやオンラインのコミュニケーションツールを使うことになるため，運営側は実際のオリエンテーションを実施する前に参加者一人一人とオンラインの接続状況確認をするなど，相当な労力をかけて実施に至っている．しかし，全国から集まる参加者のこと，本学のある仙台市に参加者全員を一同に集めることは困難であるため，現在はこの実施方法に落ち着いている．

<table>
<tr><th></th><th>日</th><th>月</th><th>火</th><th>水</th><th>木</th><th>金</th><th>土</th></tr>
<tr><td rowspan="2">午前</td><td rowspan="3">UCR
到着</td><td>8時半-11時
初日オリエンテーション</td><td>9-12時
授業</td><td>9-12時
授業</td><td>9-12時
授業</td><td rowspan="3">9-21時
LAツアー
全米日系人博物館など</td><td rowspan="3">9時-21時
オプショナルトリップ</td></tr>
<tr><td rowspan="2">午後</td><td>12-15時
授業</td><td>13-15時
UCR
散策ツアー</td><td rowspan="2">13-15時
チームビルディング
アクティビティ</td><td rowspan="2">13-16時
カルチャー
活動</td></tr>
<tr><td>15-17時
東北大
プレオリエンテーション</td><td>15:15-16:15
東北大
プレオリエンテーション</td></tr>
<tr><td rowspan="2">午前</td><td rowspan="3">9-21時
オプショナルトリップ</td><td>9-12時
授業</td><td>9-12時
授業</td><td>9-12時
授業</td><td>9-12時
授業</td><td>9-12時
修了式
最終成果発表</td><td rowspan="3">UCR
出発</td></tr>
<tr><td rowspan="2">午後</td><td rowspan="2">13-15時
リバーサイド
市庁舎訪問</td><td rowspan="2">12時半-20時
San Juan Capistrano
フィールド
トリップ</td><td rowspan="2">13-16時
英会話ﾊﾟｰﾄﾅｰ
との活動</td><td>13-16時
送別会</td><td rowspan="2">13-15時
振り返り
セッション</td></tr>
<tr><td>9-12時
ゲスト
スピーカー</td></tr>
</table>

図1. プログラムスケジュール（例）

2.4.2 学習と交流促進のためのeポートフォリオとSNSの利用

入学前海外研修に参加することが決定した参加者らは，TGLプログラムに登録している本学の学生が普段から利用しているeポートフォリオにアクセスする権限を与られる．このeポートフォリオには学生自身が自らの学びを蓄積したり，TGLプログラム登録者同士がコミュニケーションを行える機能がある．本研修の参加者らも，このeポートフォリオを利用して各種課題を提出したり，参加者同士で交流を図ったりする．事前課題として，現地情報調査などをグループで行わせることで，現地で共に生活することを具体的に想像する機会も設けている．このようなグループ課題についてもほとんどの場合，オンライン上でのやり取りで行っているが，SNS（多くの場合，LINE）の利用に慣れている参加者らにとっては特に支障はないようである．

また，参加者らは，第１回目の事前オリエンテーションにてオンライン上で自己紹介をした後はLINEやFacebookなどのSNSを用いて親睦を深めることが通例となっている．このやりとりには，本研修の参加者だけでなく，渡航先であるUCRで日本語を学ぶ学生や，現地でお世話になる先生が仲間に入ることもある．この仕組みにより，学生は現地渡航前から参加者および現地の大学生らと親しくなれる．ここで知り合った現地の大学生がその後日本（場合によっては，東北大学）に留学したり，就職したりするケースも少なくなく，ここで始まった交流は本研修後もずっと続いていることが参加者らより報告されている．このようなメールやSNSを通じた交流により，出発日の空港やUCRに到着直後に行われる現地学生との交流会では，参加者らは比較的スムーズに親睦を深められる．

さらに，帰国後には，２週間の現地研修での学びについての体験レポートの提出を課し，参加者の学びを振り返り，その内容を言語化し，大学生活における目標と計画を立てることで，次のステップに繋げることもプログラムの一部として実施している．

３．現地での研修について

3.1 研修の目的とテーマ

本研修の目的は，大きく分けて２つある．１つは入学前から学部を超えた意識の高い仲間と出会える機会の提供であり，もう１つはグローバル社会で求められる広い視野をもって大学生活に臨むための準備である．

現地研修では，「カリフォルニアで学ぶ多文化・多民族社会」というテーマのもと，学生が自らの体験を学びに変えられるようなプログラムの実施を目指している．例えば，米国の中でも特に多様な文化が混在し

ながらも古くから共生を目指してきたカリフォルニアにてプログラムで実施することで，実践的な英語を学びながら「多文化共生」や「人種差別」,「移民問題」など，フィールドワークやサイトビジットを通じて考える機会を提供している．大学入学前から学部を超えた参加者らと共に海外生活を通じて親睦を深められることも本研修の特長である．

3.2　現地研修の内容

3.2.1　実践的な英語の授業

図１の研修スケジュールにある通り，現地では，午前中は実践中心の英語の授業が行われ，午後には課外活動を行うパターンが多い．授業の講師にはUCRで普段から英語教育を行なっている１名の先生が２週間を通じて教えてくれるため，参加者らは講師と良好な関係を構築できる．授業内容としては英語を学ぶというよりは，米国の多文化社会や文化について参加者らが主体となって学ぶ中で，ディスカッションやプレゼンテーションなど実践をしながら英会話力を磨けるような内容になっている．授業最終日には，２週間の成果について英語でプレゼンテーションすることにしているため，参加者はこのプレゼンテーション発表に向けて相当な時間をかけて準備することになる．最終発表日の堂々とした態度を見る限りは，参加者らはこのプロセスを通じて人前で英語を話すことに対して自信をつけているようである．

3.3　プログラム開発での創意工夫

本節では，実際に参加者らが現地でどのような研修を行っているか，また，プログラムを構成する上での主な工夫について紹介する．

3.3.1　宿泊形態

本研修では，現地学生との交流やホームステイ生活を行うということをプログラムの大切な要素の１つとして組み込んでいる．参加者２名ごとに１つのホストファミリーが割り当てられることになっており，生活環境から異文化に触れることで，参加者らは米国に根差した多文化社会について実体験を通して学ぶ. 実際，過去に割り当てられたホストファミリーを振り返って見ても，移民の家庭であるケースが多く，参加者らは大学での授業以外で，米国の多文化社会を経験することになる．これまでにもヒスパニック系米国人やアジア系米国人，アフリカ系米国人など，色々な国にルーツのある家庭がホストファミリーとして参加者を迎え入れてくれた．このため，一言で米国でのホームステイと言っても，家庭によって食生活を含む生活習慣が異なり，参加者らはそれぞれのホストファミリーとのエピソードを共有することで，多文化社会についての理解を深めている．

3.3.2　現地学生との交流

現地研修では，なるべく多く現地コミュニティの人々と交流できるようにしている．例えば，UCRで開講されている日本語の授業に参加することで現地の学生らと知り合い，参加者らと交流が始まる仕組みをつくっている．また，UCRに到着直後にあるウェルカムパーティには，UCRで日本文化のクラブに所属している学生らを招待して，参加者との交流機会を提供している．到着直後にこのような機会を提供することで，学生らはその後の2週間の間に現地学生らと自ら交流するきっかけを与えている．

上記のような仕組みを成立させるには，UCRの先生の協力が不可欠である．先に紹介したメール交換プロジェクトも，UCRで日本語を教えている先生の協力と支援により成り立っている．本学の学生もUCRの学生にお世話になるだけでなく，例えば，本学が協定校の学生対象に開講しているサマープログラムであるTUJPにUCRの学生が来る際にはUCRの学生と交流している．このように単に学生を送り合うだけでなく，これまで東北大学とUCRの交流関係をうまく循環させるシステムを構築してきたことにより，学生交流がより潤滑になされるような工夫をしてきた．

3.3.3　東北大学レクチャー

東北大学レクチャーは，本研修中に，東北大学として参加者らに学んでほしいことを取り組む時間として研修スケジュールの中に何度か含めているものである．例えば，本学からカリフォルニア大学に交換留学している在学生からの大学生生活や留学に関する話を聞いたり，アメリカで働いている方から海外でキャリアを築くことについてレクチャーを受けたりなど，この枠の中で東北大学ならではの取り組みを行ってい

る．研修最終日には，２週間の学びについての振り返るセッションの時間を設け，今後の大学生活に対する目標も改めて考える機会を与えている．東北大学レクチャーを取り入れた当初は，海外に行ってまで東北大学に関連したことを話す機会を設ける必要性を筆者自身あまり感じていなかったが，ここで行う振り返りや目標設定は，参加者の学びの深化に重要な役割を果たしていることが，参加者らとの対話や体験レポートの中で明らかになっている．

3.2.4　フィールドトリップ

フィールドトリップは，基本的には，午前中の実践英語の授業で学んだ知識を実際に見聞きするチャンスとしてできる限り豊富に盛り込んでいる．例えば，午前中の授業でカリフォルニア州の成り立ちについて学んだ日の午後には，サン・ファン・カピストラーノ礼拝堂に出向き，18世紀後半にスペインからメキシコ経由でやってきた宣教師らの歴史や生活について見学する機会を組み合わせている．その他に，事前課題として日系アメリカ人について調べてもらっているため，現地滞在期間中に全米日系人博物館を訪れ，日系アメリカ人の歴史や文化について見聞きできるようにしている．このように，本研修では参加者らが現地でしか体験できないことをプログラムスケジュールに組み込むことで，参加者の学びを深める工夫をしており，普段とは異なる環境で学び，活動する中でグローバルな視野を養うことを意識してプログラム開発した．

４．本調査について

4.1　調査目的

本稿では，参加者が書いた体験レポートと参加者に対して行った追跡アンケートの結果を元に，参加者が本研修を通じて何を学んでいるのかについて検証する．入学前研修に関してはその実践のみならず，その効果についての検証は筆者が調べた限りでは見当たらない．そこで本稿では，本研修における参加者の学習成果を明らかにすることで入学前の短期海外研修の意義について考察することを目的とする．

4.2　調査対象者

本稿は，2017年度時点における過去の本研修参加者が記述した体験レポートを調査対象とした．本調査は，過去に本研修に参加した全学生66名のうち，追跡アンケートへの回答があった31名を対象とした（回答率47%）．アンケート回答者の内訳としては，男子学生61%，女子学生39%，また，所属は工学部49%，農学部19%，理学部19%，文学部13%であった．これは，これまでの研修参加者の比率とほぼ同じである．

4.3　調査方法

本稿の分析の中心となったデータは，（１）各研修実施後に参加者が課題として提出していた体験レポートと，（２）2017年７月25日～８月13日の間に本研修の過去の参加者に対して行なった記名式の追跡アンケートの２つである．実施時期が異なる２種類のデータを検証することで，参加者の研修体験から帰国した直後と，参加から半年～数年経過してから振り返った上での本研修での短期的及び長期的な学習成果について明らかにすることを目的とした．

体験レポートについては，NVivoを用いて参加者の本研修での学習成果に関する内容をコード化し，最終的に共通したキーワードを４つ抽出した（5.1参照）．このプロセスにおいて過去に提出された全ての体験レポートを調査対象としたが，さらに深く考察する目的で，５名の参加者の体験レポートを無作為に選び（表４参照），さらに考察を進めた．ここで選ばれた体験レポートの内容については，個人が特定されない範囲で，次章以降で引用する．体験レポートを研究目的で使用することは予め参加者より了承を得ているが，個人情報等保護の観点から個人名はすべて伏せた．また，追跡アンケートに関しては，回答のあったすべてのデータを用い，SPSSを用いて量的な分析を行なった．

表4.　体験レポートの分析対象者

参加者	性別	学部	英語力	海外経験
A	女	文系	平均的	あり 非英語圏・旅行程度
B	男	理系	平均的	なし
C	男	理系	低め	あり 英語圏・旅行程度
D	女	理系	高め	あり 非英語圏・旅行程度
E	女	理系	高め	あり 英語圏・旅行程度

５．調査結果と考察

5.1　体験レポートの記述から見えた参加者の学び

これまでの本研修の参加者が，現地研修から帰国して１ヶ月以内に書いた体験レポートをもとに学生らの本研修での学習成果について分析した結果，４つのキーワードが浮かび上がった．この４つとは，（１）ほかの参加者からの刺激や学び，（２）自文化や異文化への関心の高まり，（３）海外へ行くことへのハードルの低下，（４）大学生活における目標の明確化・具体化である．さらに，これらのキーワードは独立したものではなく，相互に関わっている傾向にあり，このような相乗効果により本研修での参加者の学習成果を深めていることが見えてきた．

5.2　追跡アンケートの結果から見える本研修の成果

体験レポートに加え，参加者が帰国後から半年以上経過した時点で行った追跡アンケート調査の結果を以下の表５に記す．表５の通り，本研修参加後の意欲や姿勢に関する参加者による自己評価（５件法）についての結果からも見て取れるように，例えば「短期・長期で留学することへの姿勢」では、ほとんどの学生が「非常にそう思う」と回答している。その他にも，「外国学習への意欲」や「自分とは異なる文化背景を持つ人と交流する姿勢」が高く自己評価されており，体験レポートと照らし合わせてみても，参加者らは現地研修から帰国後に体験レポートに記された学習成果のキーワードについてその場で考えているだけでなく，その後，実際の行動に結び付けていることが分かる．

5.3　レポートとアンケートの比較から見えた成果

本節では，体験レポート及び追跡アンケートの結果から，参加者が本研修での学習成果どのように捉えているのか紹介する．体験レポートから明らかになった参加者の学びに関する４つのキーワードを軸として，参加者らの本研修での学びと成果について体験レポートでの参加者の記述を適宜引用しながら検証する．追跡アンケートの結果と比較することにより，長期的にはどのような成果があったのかも考察する．なお，引用部分内の筆者の補足は［　　］内に示し，強調したい部分には下線を引いた．

5.3.1　ほかの参加者からの刺激や学び

参加者らの体験レポートの分析を進める中で，「ほかの参加者からの刺激や学び」に関する記述が頻繁に確認された．次にその一部を紹介する．

> この研修のメンバーと出会えて，［省略］みんなが自分にしかないもの，強い個性をもっており，一緒に活動していて刺激になることばかりだった．【参加者B,理系レポート】

> 研修中はカリフォルニアの環境だけでなく，とも

表5. 研修後の意欲・姿勢に関する自己評価（5件法）

	内容	平均	SD
チャレンジ精神	短期・長期で留学することへの意欲	4.54	0.63
	外国語学習への意欲	4.15	0.77
	専門外の知識でも広く身につけようという意欲	3.85	0.86
	ハードルの高い目標を達成しようという意欲	3.77	0.70
自己確立	何事もなんとかなると思える自信	3.92	0.86
	自分の将来の目標に対するモチベーション	3.92	0.83
異文化理解	自分とは異なる文化背景を持つ人と交流する姿勢	4.15	0.30
	多様な価値観を認識し、自分との違いを受け入れる姿勢	4.08	0.15
	異なる考えや価値観を積極的に取り入れる姿勢	4.08	0.08
	国内・国際時事に対する関心・興味	4.08	0.62
	自分の国の文化の長所・短所に関する理解	3.77	0.20

に活動した仲間からも多くの刺激を受けた．高校時代は主に県内から集まった仲間と学校生活を送っていたため，新たに刺激を受けるということはあまり多くなかった．しかし，今回の研修は出身地も学部も違う参加者が集まったため，高校時代の経験や学びたい学問，考え方や趣味・特技も十人十色でメンバーとの話がとても新鮮で楽しかった．［省略］大学入学後も，研修で出会った仲間とは定期的に会っており，たくさんの刺激をもらっている．【参加者E,理系,レポート】

さらに，下にある表6の追跡アンケートの結果にも同様の意見が反映されており，「他の学生との交流ができ，仲が深められた」という質問項目に対して，ほとんどの参加者が「非常にそう思う」と回答していた．また，追跡アンケートへの記述欄から，参加者らは現地研修から帰国した後も一緒に英語の勉強をしたり，留学に関する情報共有やモチベーションを高めたりする仲間として，本研修の参加者らを位置づけていることも把握できた．

表6. 参加者が考える本研修での学習成果（4件法）

内容	平均	SD
自分の視野を広がった	3.74	0.51
大学入学後のモチベーションが高まった	3.68	0.47
他の学生と交流ができ、仲を深められた	3.65	0.70
異文化への関心が高まった	3.58	0.61

このように，参加者らは研修中だけでなく，研修後も，学部や出身の異なる他の参加者から大きな影響を受けていることが確認でき，大学入学後も切磋琢磨しながら，大学生活を送っていることが体験レポートと追跡アンケートから把握できた．これは，参加者同士の存在が，入学前教育の目的の一つである「大学生活へのモチベーションの維持」ということ以上に，大学生活に対するモチベーションの向上をさせ，そのモチベーションの高まりを維持する仲間として，機能しているとも解釈できる．

5.3.2　自文化や異文化への関心の高まり

体験レポートへの記述から，参加者が本研修を通じて，いかに英語を使用したり，国際交流に関わったりする中で文化に対する関心が高まりについて垣間見ることができる．以下にそのことが分かる記述をいくつか引用する．

初めは自分から話しかけるということがなかなかできず，一歩を踏み出せずにいた．しかし，現地の学生が積極的に話しかけてくれ，話がだんだん弾むようになり，会話を楽しめるようになった．次第に話題も広がり，現地の留学生と親しい友達になることができた．大学入学後も，外国人留学と積極的に交流している．【参加者D,理系,レポート】

また，本研修を通じて異文化だけでなく，自文化に対して関心が高まったという記述もあった．

［本研修を通じて］日本についてよく理解しなければならないということを痛感した．最初は狭く深くではなく，広く浅く，日本文化の概要を掴みたい．そして，それを英語で伝えられるよう，身近な外国人に聞いてもらうことから始めたい．【参加者A，文系,レポート】

今後は自分が生まれ育った日本の文化についてさらに知識をつけたいと考えている．先生が，文化とは氷山のようなものだと教えてくださった．一目見ただけではわからない奥深さが文化にはあるという意味で，研修を終えた今だからこそ共感できる言葉だ．私が見ている日本文化の氷山は18年住んでも足りないぐらい深みを持ったものだったし，研修で初めて垣間見たアメリカ文化の一角には度肝を抜かれたことも魅了されたこともあった．［省略］これからも，国の内外を問わず様々な文化と触れ合って瑞々しい感性を持った人間に成長していきたい．【参加者A，文系,レポート】

参加者Aは元々異文化への関心は高かったものの，

外国人と意見交換したり，自分の文化について他の国の人に説明したりする経験はほとんどなかったそうだ．しかし，本研修での経験を経て，「異文化交流には，自文化という軸にして発言することが大切」であることに気づいたため，今後は自文化について理解を深めたいとのことだった．

ここまでの例に見られるように，参加者によって異文化体験の差はあるものの，今回の調査から，参加者らが本研修から帰国しても英語を頻繁に使用したり，外国人留学生と定期的に接したりなど，異文化交流に積極的な様子を把握することができた．また，表５にあるとおり，多数の学生が「異文化理解」に属する項目に対し高い評価をしている．その中でも特に「自分とは異なる文化背景を持つ人と交流する姿勢」については，積極的な意欲･姿勢を示した参加者が多かった．

また，追跡アンケートの結果から，研修参加者の半数程度が大学入学後も「週に数回程度」，授業以外の場で英語を使用していることも分かった．さらに，全体の16％の学生が，「ほぼ毎日」授業以外で英語を話していることも分かった．これについては，73％の研修参加者が「（授業の外で）国際交流に積極的に関わっている」と回答していることにも関連している．

さらに，追跡アンケートでおこなった履修科目に関する質問項目では，全体の72％（２年生以上に限定すると94％）が大学で国際共修授業[2]を２科目以上履修した経験があることが明らかになった．学生は入学前海外研修の中で，英語で授業を受け，積極的な発言を求められる環境を経験したことで，自信をつけたようである．

以上より，参加者らは本研修を通じて，異文化だけでなく，自文化への関心を持ち，その後の大学生活でも継続して，その関心を継続して持ち続けていることが明らかになった．

5.3.3　海外へ行くことへのハードルの低下

体験レポートにおいて「海外に行くことへの関心が高まった」という以下のような記述が共通して見られた．

> この研修は初の海外研修であった．申し込み前，行くかどうかものすごく迷ったが，締め切り当日，勇気を出して「参加する」という決心をした．研修を終えて思うことは，［省略］これまで国内で十分だと思っていた自分だったが，「留学してみたい・国際交流をしてみたい」「将来は世界を舞台に仕事をしたい」という思いが芽生え，高まった．【参加者C，理系，レポート】

「海外に行く」ということに関連して，追跡アンケートで改めて海外留学に対する希望を聞いたところ，全体の87％が「本学在学中に海外留学を希望」しており，そのうち67％は「６か月～１年の交換留学」に行きたいことが分かった．これは，2017年度に本学で行われた留学希望学生が履修する授業「留学のすすめ」の履修者と比較しても，より長期の留学を目指していることが分かる（図２参照）．

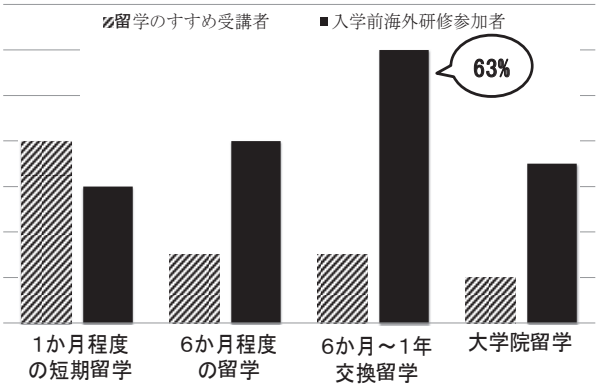

図2. 希望する留学形態（複数選択可）

先に提示した追跡アンケートにおける参加者の意欲や姿勢に関する自己評価の結果（表５参照）からも同様のことが見て取れる．例えば「短期・長期で留学することへの姿勢」では，多数の学生が「非常にそう思う」と回答している．その他にも，「外国学習への意欲」や「自分とは異なる文化背景を持つ人と交流する姿勢」が高く評価されていることを確認した．

上の例にあるように，本研修はわずか２週間という短い期間で実施される海外研修にも関わらず，参加者らは，その経験を糧に大学生活でも積極的に，また海外研修で培った行動力を使って，大学生活に関与していることが本調査を通じて把握することができた．

5.3.4　大学生活における目標の明確化・具体化

本研修では，事前オリエンテーションの時点の課題として，目標設定をする機会を設けている．この目標設定では，自分が抱えている課題を洗い出した上で，現地研修に向けて目標とその目標を達成するための計画を立てる．研修から帰国したあとも，出発前に立てた目標を振り返り，自身の学びや成長について考える．このようなプロセスを経て，参加者らは，実際に大学に入学する前に，具体的な目標を持つようになるようである．以下，２名の参加者の体験レポートに記された目標を紹介する．

> ［本研修を経て］これからは受け身でいるのではなく，自分で行動を起こすようにしていきたい．少しの勇気や挑戦心をもつだけで，見える世界が広がり，貴重なものを手に入れられる．やろうかどうか迷っていることがあったら，思い切ってチャレンジしていきたい．［省略］新たな世界に飛び込み，失敗を力に変えるぐらいの気持ちで何事にも挑みたい．【参加者Ａ，文系，レポート】

> 今後は一般的な知識や英語の語彙力の増強に努めようと考えている．具体的には，日頃から世の中で起こっていることに対して幅広く関心を持ち，ニュースを見たり，新聞に目を通すことが挙げられる．知っている英単語の数を増やすことも必要なので，TOEFL対策の英語の授業の中で出できた単語は確実に覚えることも大切だ．さらには，留学生と交流できるサークルに所属したり，グローバルゼミ[3]などの国際共修の授業を受講することで，もっと英語で会話をする機会を増やしたい．こういった交流の場の存在を知ることができたという意味でも，今回入学前海外研修に参加して本当に良かった．【参加者Ｄ，理系，レポート】

以上のように，本研修の参加者は，大学入学前から，大学生活での目標を具体的に見つけられているケースが多く，入学前に本研修に参加したことがきっかけとなってより具体化するケースも少なくないようである。ここでの記述と同様に，追跡アンケートにおいても参加者らは，本研修の成果として「大学入学後のモチベーションが高まった」と評価している（表６参照）．このように高いモチベーションを持って，大学に入学することで，豊富な機会に積極的に臨めていることも体験レポートの記述と追跡アンケートの結果の両方で確認できた．これは，本研修に参加したことで得られる大きな学習成果であると言える．

６．まとめ

本稿では，これまでの入学前海外研修の参加者に向けて，参加者が現地研修終了後すぐに提出した体験レポートと，帰国後半年以上経過してから行った追跡アンケート調査の結果を照らし合わせて，参加者らの入本研修における学習成果について検証した．

本稿における調査から，本研修での経験は，参加者にとって総じてポジティブな学習成果を与えていることが分かった．また，参加者は本研修で学んだことやそれをもとに目標として見出したこと（体験レポートに書いたこと）について大学入学後，何らかの行動に移していることが追跡アンケートから分かった．特に，グローバル人材育成の観点からは，本研修に参加することで，大学入学後に，積極的に国際交流活動に参加したり，英語学習を行ったり，また，国際的な環境で行われる授業を履修したりすることで，本研修の経験が具体的に参加者の大学生活にどのように生かされているのかについても把握できた．さらに，本研修の参加者にとって，「仲間からの刺激」が特に大きく影響し，研修終了後も影響を与え続けている点は興味深い．この点は，本研修を企画した当初には予想しておらず，思いがけない結果となった．

本研修のように，大学入学前から海外研修を通じて，学生の大学生活へのモチベーションを向上させ，その後の大学での学習や生活に備えることは，入学前教育として，非常に有意義であることが確認できた．以上のように，入学前海外研修は２週間という大変短い期間の海外研修でありながら，その参加者へのその後の影響を考えると，入学前教育としても大変有効であると言えるだろう．

謝辞

この入学前海外研修の立ち上げ，実践にあたり，学内外の多くの方にご協力・ご支援をいただいた．その中でも特に東北大学 高度教養教育・学生支援機構 グローバルラーニングセンターの山口昌弘センター長および末松和子副センター長，また，引率・実施に際してご協力くださった坂本友香先生，中島美奈子先生，カリフォルニア大学の佐藤玲子先生にこの場を借りて深く御礼申し上げたい．

注

1）エッセイのトピックは，年度によって多少異なるが2017年度は,「本プログラムに参加を希望する理由（志望動機）」と「どのような大学生活を送りたいか」の２点について, 350～500字程度（日本語）で応募フォームに記入してもらった．

2）言語や文化など異なるバックグラウンドを持つ学生同士が，授業内で意味ある交流を通して相互理解を深めながら，他者を理解し，己を見つめなおし，新しい価値観を創造する学習体験のこと．

3）TGLプログラムで，グローバルリーダーに認定されるための必須科目のこと．アクティブラーニング形式の授業で，学生の主体性が求められる授業である．多くの入学前海外研修の参加者が，この授業を履修し，グローバルリーダーに認定されることを目指している．

参考文献

ベネッセ総合教育研究所 高等教育研究室（2014）「高大接続に関する調査」, pp.28-32, http://berd.benesse.jp/up_images/research/2014_koudai_05.pdf（閲覧2019年１月15日）.

川西雪也・新井野洋一・湯川治・小松川浩（2008）「e-Learning を活用した入学前教育に関する実証研究」,『日本リメディアル教育学会第４回全国大会予稿集』日本リメディアル教育学会，pp.21-22.

文部科学省（2013）「大学入学者選抜，大学教育の現状」, 首相官邸・教育再生実行会議. http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/dai11/sankou2.pdf（閲覧2019年１月15日）.

高松正毅（2016）「高大接続システム改革会議の最終報告を前に」『リメディアル教育研究』Vol.11, No.1, p.5-13.

東北大学（2013）「平成26年度入学予定者から『入学前海外研修（High School Bridging Program）』を国立大学として初めて導入」, https://www.tohoku.ac.jp/japanese/2013/12/press20131205-02.html（閲覧2019年１月15日）.

東北大学（2018）「東北大学AO入試のご案内」, 東北大学教育・学生支援部入試課, https://web-pamphlet.jp/tohoku/2019e6/html5.html#page=1（閲覧2019 年１月15日）.

東北大学 高度教養教育・学生支援機構（2018）『個別大学の入試改革』, 東北大学出版会.

University of California, Riverside（UCR）（2018）Rankings and Quick Facts, https://www.ucr.edu/about/ranks-and-facts（閲覧2019 年1月 15 日）.

山岡憲史（2015）「接続教育支援センターにおける入学前教育の到達点」,『立命館高等教育研究』15号. pp.55-71.